

父から教わったこと

診療支援部歯科衛生部門 山田 麻衣子

私の父は観光バスの運転手で、小学生の頃の夢はバスガイドさんになって父といろいろなところへ行くことでした。この話をしたとき、父がとても嬉しそうにしていたのを今でも覚えています。

ところが、お年頃を迎えた私は夢をすっかり忘れ、歯友会歯科技術専門学校（私が入学した次の年から明倫短期大学に変わりました）の国家試験合格率・就職率ともに100%と書いてあるパンフレットにつられ、なんとなく歯科衛生士科に入学してしまいました。2年間で歯科衛生士として働けるように組み立てられたスケジュールはとても厳しいものでした。指導してくださった先生方や、私と同じ班になったしまった班長さんには大変なご苦勞をおかけしてしまいました。おかげさまでなんとか歯科衛生士になることができました。楽しい仲間たちにも恵まれ、良い思い出がありません。

その頃、父は仕事で不在のことが多く、私にとって空気のような存在になっていました。父のことで知っていることといえば、職業とお酒が好きなこと、あと、母に内緒でこっそりタバコを吸っていることくらいでした。その父が9年前、肺がんでステージ4という診断を受けました。父の希望は積極的な治療はせずに『家で過ごしたい』でしたが、父の現実を受け入れられなかった私たちは、父に治療してほしいと頼みました。父は家族のために治療に踏み切る決意をしましたが、放射線も抗がん剤もさほど効果は発揮せず、結局ほとんど家で過ごすことなく半年後に他界しました。父の気持ちを優先してあげられなかったことを後悔するとともに、生前、父と関わりのあった人たちから私の知らなかった父を知ったり、遺品から破ったメモ帳に落書きみたいに書かれた私からの手紙や、父にとって思い出の品であろうガラクタが大切に保管されているのを見つたりして、最期まで家族のために生きた父の愛情

に感謝しました。

親が子にできる一番の教育は死ぬことだと聞いたことがあります。意味がよく分からなかった私も親になり、父が亡くなったことでなんとなく理解できた気がしました。ありきたりですが、結果はダメでもチャレンジすることは素晴らしいこと、お酒は楽しいこと、たくさんの人たちと関わり合うこと、良心に従って生きることなどを自分自身が実践して、精一杯生きること子ども達に伝えたいと思います。

なんとなくで歯科衛生士になりましたが、家族と一緒に働く人たちに支えられ、もうすぐ19年目を迎えます。矯正歯科クリニックに勤務したあと、老人保健施設に併設されたクリニックに勤務し、平成26年4月に新潟大学に来ました。今は外来棟4階の顎関節・インプラントのエリアで働いています。通勤に時間がかかるので出勤時間が早く、子ども達に見送られて出勤しています。子ども達の目には『お仕事がんばっているお母さん』に見えているようなので、期待にそえるようがんばりたいと思います。

